

## 身体拘束廃止に対する利用者家族とスタッフの意識

～身体拘束を廃止し 17 年経過した今 改めてケアを考える～

熊澤 誠<sup>1)</sup> 木村 聡<sup>1)</sup> 滝原 典子<sup>1)</sup> 美原 恵里<sup>2)</sup>

1) 公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 看護介護部

2) 公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 施設長

[背景]当施設では平成 13 年 1 月に身体拘束を完全に廃止した。その後 16 年間、身体拘束は一切行っておらず、拘束という言葉すら聞かれなくなった。今回、ご家族と職員の双方の意識を調査し、それぞれの立場から求められるケアについて検討したので報告する。

[方法]・認知症専門棟利用者のご家族 23 名と当施設の全看護介護職員 73 名を対象とした

・利用者の家族に対しては、選択式アンケート調査を実施した。職員に対しては、選択式、記述式のアンケート調査を行った。

[結果]利用者の家族に対するアンケートでは、16 名で拘束された経験があると回答した。経験があると回答した家族に対して「身体拘束されている姿を見てどう思ったか」の設問では、15 名が「気になるが仕方ない」と回答した。「身体拘束されている様子について」は 15 名が「変化あり」と回答した。「身体拘束をしないことで、本人の様子に変化が見られたか」は、15 名が「変化あり」と回答した。「身体拘束を行わなくなってよかったと思うか」の設問では 16 名が「よかったと思う」を回答した。職員に対するアンケートでは、26 名が「身体拘束の経験がある」46 名が「業務の中で身体拘束したいと思ったことはある」と回答した。しかし「当施設が行っている身体拘束廃止について」は全職員 73 名が「賛成」と回答した。

[考察・まとめ]家族は、身体拘束を外したことで利用者の変化する姿を目の当たりにすることができ、よかったと実感していた。一方、身体拘束廃止を進めるためには、家族の理解だけでなく施設全体が強い信念で「身体拘束しない」ケアを実践していく必要がある。当施設では 16 年間継続して行ってきたこの取り組みにより、「身体拘束しないことが当たり前」という施設全体の風土が作り上げられてきた。これは、職員一人ひとりの「利用者の尊厳を大切にする」という強い思いに支えられ築かれたと考える。